

ゼリンデ

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン著

鈴木満訳・注・解題

や、お読みくださるとは かたじけない。あなたが以前旅をなすつた折トウ三グライヒエン(1)に立ち寄って、あそこの名所古跡の数をご覧になったか、あるいは、あのすてきなムゼーウスの愉快な民話、それもとりわけ「メレクザーラ」をお読みになったとすれば、わたしたちがこのささやかな物語であなたをご案内つかまつろうとしている地方「テューリゲン」とはまんざら無縁ではないわけ。晴れやかなご記憶が既に一度ご覧になった絵巻を別の彩りであなたの目の前に繰り広げてくれますように。——そしてあの、とうの昔に忘れ去られた時代から至極厳肅な面持ちで、変化に富み、しばしばとてもおかしなことがある今日こんにちの営みを見齋はかしている昔の城塞群が、すなわち、後の諸世代に対して堂堂と身を持っている記念碑（とは申せ、そこそこでその古い石材が納屋とか羊小屋とかに大いに有効に活用されていることもあるけれど）が、そそり立っているかしこの地へ、朴訥ぼくちやなドイツ気質かたぎとドイツの力がかつて支配していたあれなる土地へ、ご親切な読者のあなた、どうか心の中でわたしたちに随ついていらしてくださいな。

ミュールベルク城(3)の廢墟が蝕むしばむ時の齒はに今なお抗あっているあの丘の下に、同名ののどかな市場町がある。この町中に泉が一つあって、住民に噴シユプリング泉と呼ばれている。うらうらと晴れた空から太陽がその碧玉色エメラルドの豊かな水に映る

己が姿をのんびりと眺めている。なにしろこの泉、鏡のように清らかで、水面に漣を立てるのは穏やかな微風の息吹だけだから。白い睡蓮(1)が暗い水底から花の冠をもたげ、水金鳳花(2)の黄金の薬が上を向いてきらきらと輝く。太陽が水晶のように澄み切った泉に光線を送ると、水中で何か不思議な、柔らかな輝きがちらちらと光り、水ではなくて、水底を、目の届く限り見下ろすと、黄金色がかかった緑や白銀の色調を認めることだろう。底の砂利さえともに輝き、陶器の破片などを水面に置くと、ゆっくりゆっくり、ゆうらりゆらりと揺れながら沈んで行き、これまた束の間かつと光芒を放つ。

ひっそりとした夏の宵、星星が空に昇り、清らかな水面に影を映す頃おい、木木の間でさらさらといとも妙なる旋律が鳴り渡ることがよくあった。泉の汀でひそひそと呟くような時もあれば、遠くの唄声か横笛の名残の響きが湧いているように聞こえることも。そのたびに村人は思案顔で耳を欮て、頭を振るのだった。嘆声の源が空なのか泉なのかとんと見当が付かないので。

どうしてそれが始まったのか、事の次第はこの昔話が告げてくれますよ、お読みくだすっているあなた。ミュールベルク城の廢墟で白屈菜(3)や和蘭萱蒲(4)を探していて、車葉草(5)の薬効を教えてくださいましたある晰好きのご老体が、そこでわたしたちに物語ってくれたことを、いささか詩的な装いを凝らしはしましたけれど、もう一度あなたにお話しいたしましょう。

グライヒェン伯爵エルンストが、かの魅惑的なサラセン女性——彼女、伯爵を虜囚の身から解き放ってくれたのはいいが、その代わり改めてずつと綺麗な枷に括り付けたわけ——とともに、聖地から美しきテューリンゲンに帰還した時——さよう、その前にローマなる聖父「教皇」が長いこと拒み続けたものの、とどのつまり、勿体無くも御手づから相愛の二人に婚姻の絆を巻き付けたもうた「二人の結婚の司式をした」のだが——、国許で伯爵は、ひたすら待

ち侘びてくれた貞淑な奥方エリーザベトに再会した。そして彼女は夫とこの異邦の女性をまことにいそいそと迎えたのだった。こうした顛末は悉皆、ずっと素晴らしく、かつ詳細に民話「メレクザーラ」(6)でお読みになることができます。わたしたちは、このような場合愛する背の君にまるきり違う挨拶でお応え申す女性をたくさん存じておられます。エリーザベト夫人のようにその居城で独り淋しく何年も何年も過ごしたんでなくつてもね。げにも、テンポールムタントウーラ・エト・ケーテフス 時ハ移ロイ行キ、ウンヌンである。

かくて伯爵の胸は感謝と歓喜に満たされ、伝令官を近隣のあらゆる地域に遣わし、雄雄しき騎士輩を悉く居城へ招待、ここで馬上槍試合と祝祭を催し、二度目の婚儀をことほぐことにした。

往時にはよくあつたことだが、故郷での暮らしがどうにも退屈でならなくなった騎士が諸国遊歴に出掛け、運を天に任せて闘いや冒険を求め、世間に駒を進めたもの。アルフレート・フォン・タンネンヴェルト殿もその一人。彼の城はリューゲン島の荒涼たる場所であり、バルト海の岸辺からほど遠からず、黒みがかつた緑の松林に取り巻かれ、暗鬱な周囲からさらに陰陰滅滅と聳え立っていた。若き騎士は、曠野の獣たちや領分の森の隘路と峡谷に潜むけちな盗賊どもとの闘いうんざりして、父を父祖の奥津城に埋葬するとすぐ、城塞と所領をある誠実な友の庇護に托し、絶対に彼と離れようとしなかつた従士をただ一人伴い、船に乗って海を渡り、意気軒昂としてプロイセンの海岸上陸した。ドイツの騎士道は素晴らしく花盛りで大いに枝葉も茂っている、と、風評を耳にしてどうの昔から脳裡に思い描いていた彼であつたが、聞かされていないことがまだ数多あるのが分かつた。二十と四回というもの檜の樹が葉を付けたのを目にした、この若さと活力に満ち溢れた、大胆でほっそりした体つきの北国の勇士は、どの馬上槍試合でもみごとに擢んで、いかなる騎士との対決も辞さなかつた。そして彼が暗色の鋼鉄の鎧に身を固め、胃に黒い羽根を靡かせ、闘技路を疾走したり、槍で突き合つてはどの敵手も砂の中に打ちのめすたび、綺麗な目が少なからず

彼の上にたゆたい、試合の褒賞がいくたびも、たおやかな両の手にこやかに差し出されて、この堂堂たる勝利者のものとなった。けれども恋という黄金の太陽がその至高の喜びで彼の心を燃え立たせたことはなく、一度唇ひとはなを触れただけで若者を永久とこしえに愛神アケルの奴隷にしまわうかの魔法の飲料をついぞ味わったことはなかった。

騎士の盾には見事な色彩で彼の紋章が描かれていた。赤い中帯ちゆうたいで二つに分かれたれ、上半分は黄金の地に無辜むこと美德のために闘う勇猛果敢さを表す黒い槍で、また盾の下半分には二本の緑なす縦の樹が青い地に聳たかえていたが、これは彼の姓を暗に示すとともに希望と信実まじしとの徴でもあった。

さて、騎士の肖像と並べて彼の忠義な盾持ちであるジーギスマール(15)を、親愛なる読者のあなたに、二筆三筆描写しておくべきだろう。もとより当今では、主人を叙述する場合、下僕のことも考えるなんて、だれも思いつくまい。この主あかじにしてこの僕しもへあり、という諺で事足れりとしてしまふ。豪胆なジーギスマールは主人を心底愛していたし、その上朴直な人柄で、横着うろかひでも老獪ろうかいでもなかった。主人の言い付けを果たしてしまふと、葡萄酒か麦酒の壺を抱えてこれに親しむのが大のお気に入り。というのも身分の上下に関わらず盾持ちの甘美な気晴らしとなったあの貴重な草ニコチアナ・タバカム(16)は当時まだヨーロッパでは栽培されていなかったからである。ジーギスマールは既に一度若き主人の命を救ったことがある。そしてアルフレートは恩知らずではないから、これを忘れはしなかった。当今ではささいなこととして失念しがちではあるが。ジーギスマールは、騎士の家来というより、むしろ友人であり相棒あいはらうだった。しかし、アルフレートがこの忠義な人物を固い絆で我が身に結び付けたのは、ひとえにきちんとした敬意をもって遇したからに他ならない。けだし、親切な主君には進んで欣然と仕えるが、これに反し、がみがみと口喧やかましく専横な支配者とか、きんきん声を張り上げて、毒と胆汁を吐き散らす「癩癩持ちの」女主人には堅忍ストア哲学的諦念と軽蔑で応えるのが人間の性分だから。

国から国へ、城塞から城塞へ、馬上トウウルニニア槍試合から次の馬上トウウルニニア槍試合へ、若き勇士は転転とした。棧敷さじきの愛らしいご婦人がお目目の魔力をしばしば彼に振るってみたものの、とんと効果無し。アルフレートは、既に申し上げたように、いまだ雅みやびの道には不案内だったのである。彼がテューリングンにやって来たのは、折も折、グライヒェン伯爵エルンストが、全ての騎士輩に招待状を送った時期。そりやまあ、我らが騎士は内心、最初の奥方が健在なのに二人目も娶めとった——彼に言わせれば——愚かな伯爵のふるまいに微笑し、大概の御仁にとつては一人の妻だつて多過ぎる、と考へた。わたしちとてそう思う。さはさりながら、かしこで催されることになっている祝祭の知らせは別に不都合ではなかつた。ジーグスマールは主人と意見を異ことにする人間ではないし、かてて加えて、のんびり骨休めができそうだ、との希望が彼の胸にぽつと暖かな火を燃やしたので、喜び勇んで騎士に従つた。——二人は遙か遠くから隣り合っているあの城塞群が横たわっているのを見た。城の窓が沈んで行く太陽の光を星星のようにきらきらと照り返している。さて、彼らがグライヒェンの城山(17)に駒を近寄せて行くと、喇りやう嘯りやうと鳴り渡る喇叭らうばの調べがさも嬉しげに迎えてくれ、ジーグスマールが塔の物見の者に騎士の家柄と名を告げると、撥はね橋が下りて来て、甲斐甲斐しい従士たちが歓迎かんげいの杯さかずきを手にわらわらと駆け付け、ほどなく城主自身が近づき、いとも雅やかな作法で遠来の客に挨拶した。一方、ジーグスマールは従士たちと友誼を取り結び、すぐに例の手早のクルト(18)と仲良く内輪話に興じた。エルンスト伯は遺憾いけんの面持ちで騎士に向かい、ミュールベルクの城をご使用願わねばならない、さしも広大なグライヒェン城にももう部屋が足りなくなっている始末だし、遠くからご来駕くだすつた上臆じょうりゆう方に別の城へ行つて戴きたい、とは申し上げられぬので、と頼んだ。さて、食べ物、飲み物で兩人が十二分に英気を回復し、タンネンヴェルト騎士も幾人かのテューリングンの騎士らと知己になると、手早のクルトは馬に鞍を置き、ミュールベルクを守る城代宛ての伯爵の書状を携へ、客人たちをあちらへ案内することになった。騎士は周辺しゅうへんの美しさを嘆賞、ジーグスマールはクルトと開

始した会話を続ける暇を得た。その中身は、後者が耐え忍んだあらゆる災厄とその主君の冒険の詳細な物語に他ならぬ。

グライヒェン城での祝祭行事の数数はまだ始まっていなかったので、さしあたって客たちは音楽やら遊戯、酒宴に打ち興じていた。しかし我らが騎士はこうしたことには一向気が向かなかつた。なぜならこんなことが目的だったら故郷を離れなくなつてよかつたからである。彼の心は闘いと勝利を渴望していた。という次第で、彼は幾日もの境界隈を歩き回つた。それもいつも独りきりで。豪胆ジーギスマールは、アルフレートが彼の扈從を求めない折はいつも、なみなみと満たした把手付きの大杯を愛していたからである。——しばしばアルフレートが彷徨つたのは檜の森の小暗い木蔭とか、陽春のこの上もなく麗しい花飾りに光り輝く日差しもうらかな草原。彼は次第に胸苦しくなつて来た。もはやわくわくと燃え立たせてくれる闘いへの憧ればかりでなく、どう名付けたものか分からないが、それとは別の感情が彼の全身全霊を支配するようになった。それは彼を自然の中へと駆り立てて止まなかつたが、どこにも安息は見つからず、どこにも長く留まることができず、先へ先へとやみくもに突き進み、果ては夕方になつて疲れきつて城に戻り、白明け、きらめく真珠のような露が朝日の黄金の光線によつて燦然たる金剛石に変えられもせぬうち、またしても飛び出す始末。ところがある日こんなことが起こつたのである。黄昏刻こうした騎行から引き揚げて来た彼がかの泉の畔を通り過ぎようとすると、乗馬が横跳びをしたので、はつと深い物思いから覚めた。駒に拍車を掛けたものの無駄だった。いつもは温順で伶俐なこの動物が一向その場から動こうとせぬ。騎士がふと目を上げると、なんと——不思議な白銀色の微光に、ひらひらと翻る面紗さながら囲まれて、なんともいえぬほど愛らしい乙女の姿が泉の縁に腰を下ろしているではないか。すると彼の心はさつと明るくなり、いらいらとした渴望は雲散霧消。突き止められぬままだつたその対象がここで見つかったことは明らかだつた。アルフレートは長い間乙女にじつと目

を注いだが、あちらは全然彼に気づかぬ様子。とうとう彼は決心して、穏やかな声音でこう訊ねた。

「乙女よ、そなたは何人なんびと。女王のようにあらゆる魅力で飾られ、涼しい泉の縁に座っているそなたは。答えてください。かような問が、優雅なお方、そなたに快からぬものでなければ」。

アルフレートは口をつぐんだ。不安で堪らず、胸がきゅっと締め付けられた。しかしこれほど嬉しい気持ちになったことはいまだかつて無い。

すると乙女は身を起こした。——豊かな巻き毛の周りには勿忘草わすれなぐさの可愛らしい花冠が飾られている。典雅な体を蔽うもつと典雅な着物は大気と霧もやから織られたかのよう。そして、その柔らかな、表情に富んだ顔は、衣装と同じく、百合の白さ。絹のような睫毛まつげを騎士に向けて上げると、茂みの中を素晴らしい響きが走った。女王の容儀で騎士に近づいた彼女は、白銀さながらの声で囁き掛けたが、ために騎士は身の回りのことをなにもかも忘れてしまった。

「騎士よ、あなたはたれ。休むことなく草原と牧場を乗り回し、駒の蹄ひづめに私の花たちを踏み躪むらせるあなたは。もしやひそかな悩みに押し潰つぶされているのですか。そしてご心痛を癒してくれるおひとをお持ちにならぬのですか。こう申すのも、ね、私にはあなたが苦しんでいやるのが分かるからです」。

彼女の言葉は歌うような響き。騎士は苦悩を感じず、ひたすら相手の顔に見入り、その声に聴き惚ぼれる。そしてとうに乙女が口をつぐんでからもまだずっと耳を敬やっていたが、とうとう、やっとのこと確かえつかえこう告げたもの。「わたしが苦しみを覚えている、とそなたが見て取ったなら、それを鎮めることもできよう。癒いやしてくださいさるなら喜んで感謝いたそうぞ。切にお願いつかまつるが、かよい花や草の茎を踏みしだいたことをお許しあれ。今後は慎んで道から外れまい。してまた、そなたの甘美な御名をお名乗りくだされば忝かたじけなくい」。アルフレートは燃えるように顔を赤らめた。自分の訥弁とつべんがあまり気の利いていなかったのは分かる。しかし、愛らしいひとは目を伏せてこう応答。

「私の名をそんなにお知りになりたいのですか。さ、それでは内緒で申し上げます。でも、これから三日がまんなさらなくては。そして、どなたにも私のことを黙っていらつしやらなくては。そうして、三日目の暮れ方、この時刻、この場所にいらつしやいませね。それまでは、ごきげんよろしゅう」。

こう語るうち、乙女の声は次第に低くなり、その臙げな輪郭が、ごきげんよう、を囁くと、再び木木の葉の間にさらさらと優に妙なる旋律が鳴り渡り、アルフレートは凝然として蒼い空に目を据えた。そこには明るくにこやかに月が昇っていたが、彼には周辺が淋しく荒涼としているように思えた。しかり。風景に魅力を添えることができたのはひとえに彼女だけだったのだ。アルフレートは、これまで柔媚な衝動が悉皆まどろんでいたその胸の裡に、甘い恋の至福の^{よみがえ}りを感じた。

城に着いたが、食堂の高脚杯ゴカールの響きにも陽気な歌声にも騎士は心惹かれなかったし、おしゃべりで、ほろ酔いのジーギスマールも主人から話を引き出すことができなかった。開け放たれた窓辺に歩み寄った騎士は、遣る瀬無い思いに満ちた視線を、あるいは高処の月の丸い白銀の面おもてへ、あるいは、香高い花の精たちが軽やかな輪舞を踊っている下の谷間へさまよわせた。漸く疲れてまどろむと、その夢の中へあの不思議な姿が現れて彼をうっとりさせたもの。

ヴァクセンブルク(2)の後方しりえがやと曙光に白み始めた頃、彼はもう目覚めてしまい、ジーギスマールは馬に鞍を置かねばならなかった。太陽が最初の光線をグライヒェン城に落とした時、またもや騎行が続けられた。どの露の雫しずくからも微笑み掛けているように思える乙女の姿を心に抱いて、アルフレートは日がな一日界隈を乗り回した。二日目もこういうあんばい。ジーギスマールには、どうして主人が寡黙になり、それでいて静かな喜びを顔に湛えているのか、皆目見当が付かぬ。けれどもこの御仁、他にすることもなかったから、たっぶり一時間を沈黙考に費やした。で、その結果彼は、よく言うように、ぴたりと釘の頭を叩いた「見事核心を突いた」次第。「ご主人様は要するに恋に落

ちたんだ」と彼はご満悦で眩き、把手付き杯の葡萄酒をちくとやらかして、考え事に集中してくたびれた頭を慰め、心に浮ぶ疑問「いったいだれと」をこれで洗い流した。というのも、性分として穿鑿好きではなかったからで。もつとも、調べてみよう、と決め込みはしたが。

三日目の朝、またしても騎士に熟睡うまひねから起こされると彼は、「こんな風なことが続くとなると、どうやらわしは皆目眠れんぞ」とぼそぼそぼやいた。それから騎士に物の具を付け、一番立派な衣装を纏わせると、天真爛漫な顔でこう訊いたものである。

「騎士様、ご家来に供をせい、とご下命でございますか」。

「いいや」がアルフレートの短い、けれど穏やかな返辞。

「いったいどちらへいらっしやろうとお考えで、騎士様」。

「東へ西へ、南へ北へ、

ひとつもと
一本の我が命の花の咲くところ」。

「いったいどんな花でございますな、騎士様」と主人の詩的な返答にびっくり仰天した従士が問い返す。

「それは百合ぞ、雪白の、

それは薔薇ぞ、湖畔なる、

それは堇すみれ、牧に咲く、

そは勿忘草よ、空の青なる」。

「吟遊詩人におなりあそばしたので、騎士様。今の小唄は豎琴ハルフェに合わせましたらこよなく優雅に響きましよう。したが、一旦『一本の花とおっしゃりながら、何ゆえ、今度は花束そっくり一束なのですかな。グライヒエン伯爵様お傍去らずの手早の盾持ち、御前ごぜんとともに奴隷となっておりまして、どうやらエジプト(23)の王スルタンの庭園の砂の中を歩き回った男だちゆうあれが、このわしにある花の物語をしてくれました。確か、ミシユルミー(24)とかなんとか申しましてな、とても不可思議な性質を持つておるそうぞ。考えまするに、殿はこの花のことを言っておられるので。そういたしますると——」。

「さつさとせぬか」とアルフレートは質問者を遮さへった。「太陽はもう天に昇っているではないか。それなのにわたしはまだここにいるのだぞ」。

忠実な従士は黙って仕事を完了。二分後アルフレートは城を後にした。こちらは頭を振り振り主を見送り、「はて、騎士様はいつたいどうなすつたのやら」と呟いた。

夕映えに薔薇色に染められた小さな雲が泉に映った時、我らが勇士は既に下馬しており、その愛馬はその頃はまた泉の周りにあつた豊かに生い茂つた牧草地で草を食はんでいた。騎士は長いことじっと待った。夕焼け雲が次第に黒く変わり、やがてそのうつすらとした輝きは徐徐に薄明となり、次いで溶暗した。周囲は墓所の静けさが支配、唄鳥たちも枝で黙もたしたまま。疲れた駒は草の上に四肢を伸ばした。一つの黒い雲の後ろから宵の明星が顔を出し、辺りはますます暗く、ますます森閑とする一方。

この日の午後、大の忠義者ジースマルはミユールベルク城の高い物見の塔に登っていた。これは今日に至るま

でまだ存在しているので、ここからは周辺のいとも魅惑的な展望をほしいままにできる。兵糧ひょうりょうをたつぷり補給して座り込んだ彼は、どこから帰って来るのか見届けようと、騎士の姿に鶺鴒の目鷹の目。いくら一円を眺めても長いことその甲斐もなかったが、日が沈んだ時ようやくと、騎士が遠くからせわしなく駒を駆って来て、泉の畔で下馬するのを見た。豪胆ジーギスマールは瞬時に決意、もう一日本人に間違いないかどうか騎士を見やると、元氣付けにもう一杯葡萄酒をあおり、いつものことだが、ゆっくりゆっくり、かつ慎重に梯子を降りた。

アルフレート・フォン・タンネンヴェルトは泉の汀をあちこちいらいらと歩き回ったが、人っ子一人姿を見せぬ。立ち去ろうと決心したものの、もう一度泉の方に目を向けると、茂みの中でかすかなざわめきが聞こえたような気がした。——なんでもなかった。駒を捜そう、と足を踏み出した時、高い黒黒とした城壁の背後から月が昇って来、その神秘的な白銀の光を泉に投げ掛けた。同時に夜鶯ナハライガールが茂みの中で甘くかきくどく愛の唄を囀り始めた。円胴弦楽器クラムメンの調べが一節虚空ひとむくうを過ぎると、驚愕した男の耳に「アルフレート」という声が響いた。辺りを見回すと、呼び掛けたのはあの麗人。泉の縁に腰を下ろし、水色の面紗で顔を覆い、巻き毛の周りに飾られているのは白薔薇と紅薔薇で編まれた花冠。膝に載せたのは黄金の七弦琴リウラ。傍そばでは泉が素晴らしい虹の七色に輝いている。招かれて騎士がその隣に座ると、彼女は騎士の手を優しく握り、うちとけた愛の言葉を囁いた。

「ようこそ来られた、私の剛毅な北国の勇士様、ようこそ。これで恋する乙女はあなたを信じることができます。この地であなただがご覧のものはね」と続けて「これらの牧場、そここの泉、せせらぐ小川、声朗らかな歌い手たちが棲んでいる小暗い林おぼろはなべて私のもの、私の思うがままのもの。私の泉に曙アウローラが映る時、森の歌い手たちは私に挨拶を送ります。花花は私の前に首うなだれ、私の被る花冠になろうと競って我が身を差し出します。微風ゼイロスは私にさまざまな調べを伝えてくれます。——私は泉の女王ゼリンデゼリンデなのです。——ああ、驚かないで、いとしいアルフレ

の夜ナハテイガル鶯がその求愛の唄を歓呼して混じえているかのよう。

とうとうゼリンデは微かに身を震わせると騎士の烈火の抱擁から逃れた。「ああ、アルフレート」と彼女は柔らかに訴えるように囁いた。「私たちはお別れせねばなりません。私のせめてもの慰めは、あなたが私をお忘れにならず、我が泉にまた戻って来てくださるということだけ」。

「おお、常春としはるの花の国から顕現したもうたいとも優美なる乙女よ、お疑いあそばされな、わたしが明日再び今日と同様憧れに満ち満ちてそなたを待ち侘びることがないなどと」そう騎士は応じる。すると、彼女が悲しげに言うよう「明日ではありませんせぬ、いとしい騎士様、明後日あさってでもありません。今宵は満月。一週間経って下弦の月となりましたら漸く、またの逢瀬おうせが参ります。その折に私の素晴らしい水晶の館をご覧に入れましょうね。かしの白銀に輝く床にはすてきな真珠の花が咲き、青玉色コウライイテの天井を透かして星星の黄金なす光が瞬くのです。それまでご機嫌よろしゅう。されど、あなたが私を絶えずいとしく思い起こしてくださいよう、私の愛の信実まことの証あかしとしてこの指環を差し上げます。これは清められた品。これを大地の中心で七種の金属から精錬したのは伎倆わざに巧みな地グノームの精たち(忍)。あなたはこの水鏡みづかみの深处ふかみにそれを沈めますとね、私、すぐさま姿を現します。まだ他にも色々特別な力のあるこの指環はあなたにとって誠心誠意まことまことの上ないお友だちをも凌ぐやも」。「そなたを凌ぐ存在などありませんようや、おお、我が麗しのゼリンデ」と騎士が急いで口を差し挟んだが、彼女は言葉を続けた。「もしあなたが、おお、アルフレート、かのお城での祝宴の賑わいに紛れて私をお忘れになるようなことがありましたら、もし、あちらに長くいらっしやり過ぎて、お慕いするこの私を真夜中過ぎまで待たせるようなことになりましたら、我らの心の魔法の絆は断たれてしまいます。そして、決して、決して、再び私の姿をご覧になることはありませんせぬ」。

悲しい声音でこう言い終わり、打ち消しの誓言が出掛かった騎士の唇に素早くもう一度接吻すると、彼女は再び、

ご機嫌よろしゅう、と呟き、霧の中に溶け込んだ。アルフレートが抱き締めたのは軽やかな大気だけ。しかし妙な音色はまだ泉の深処から立ち昇り、幾つもの微かな波紋となつて水面に拡がった。

さてアルフレートの愛馬は地面から身を起こすと、彼を乗せて速歩で城へと戻った。割り当てられた部屋に着くと、ジーギスマールが蒼褪め、引き攣つた顔で中へ入つて来、主の物の具を解きに掛かったが、その両の手は激しく震えていた。「どうぞいたしたか、ジーギスマール」と思い遣り深い声で騎士が訊ねる。その胸の裡ではいまだに慕わしい女人の典雅な面影が揺曳していた。

すると郎党の睫毛の下から涙がぼたぼた。騎士の足許にどっと跪く。「何の真似だ。何といたした」とアルフレートは訝しげに問う。

「お許しくださいまし、騎士様。どうかどうか白刃の剣をお抜きになつて、手前をばつさりやっておくんなさいまし。手前は偷み聴きをいたしました。その罪でご成敗を。どんなに責め苛まれますようと、喜んで耐え忍びます。したが、なにとぞあんな忌まわしい色恋沙汰はお諦めくださいませい」。

「そちは正気を失つたのか。熱に浮かされて譫言を言つておるのか」とアルフレートは訊き直し、跪いている従士に立つように命じた。「ああ、騎士様、ご幼少の砌からお仕え申しておりますこの忠義な家来を信頼、信用なすつて。愛してらつしやるあれはそもそも見てくれの好い水妖のたぐいなのでございますぞ。あなた様を奴の呪われた水の中に引きずり込もうちゅう魂胆。どうやら地獄の魔法の絆に括り付けてしまいましたな。お聴きなされませい。手前はあなた様が悪い噂のあるあの泉の傍で下馬なざるのをお見掛けしましたんで、山を駆け下り、村を抜け、茂みの中に潜り込みました。じいっと隠れておりましたから、あなた様は手前にお気づきにならないだ。あなた様は悪魔の網に絡め取られておしまいになつたのですよう。あの妖婦がお腕に抱かれておった時、手前は飛び出してつて、霊

験あらたかな呪文を唱えてお祓いはらをやりたかったですが、いったいそんなことができましたかなあ。どうやら(36)ひっそりかんと突つ立ったままでおらにやならなかつたでしょうなあ。身動きなんぞ叶いましたかなあ。大きな声を出せましたかなあ。やつとのことであなた様がお別れになると、手前は精一杯お城へ駆け登って、あなた様をお迎え申したわけあいで」。

「立ち上がれ。そしてもう構わんでおいてくれ。わたしはおぬしが自分を好いてくれていることは分かっている」と騎士は相手を宥なだめに掛かる。一方ジーギスマールは「手前は立ち上がりませぬ。あの魔女の泉に二度と行かない、と手前にお約束くださらぬうちは。あれがそもそも今日おっしゃってらした命の花なんですかい。あなた様はどうやら、あの水妖ニツクスがちっこい冠に編んでいた可愛い墓ひきのあんよと蛇の尻しりつ尾ぼなんぞを、ただもう綺麗なお花だ、と思ひ込まれたようで」。

「おぬし、わたしを愚弄するつもりか。でなければ、酔っ払って覗き見しおったのであろう。そしていまだに酩酊しておる。度の過ぎた喰らい酔いは慎むがよからう」と騎士は声を荒らげる。

「これはしたり、アルフレート様」と従士は噎むせび泣き。「いずれの聖者様方のご加護もあなた様から離れてしまうたのでしようか。あの悪魔奴にとことん誑たぶらかされておらるるのか。——そもそも、コロロコロロ、ゲエロゲロ、クワアクワア、ケロケロケロってのが沼地や茂み、林の中でおっぱじまりますと、あなた様は綺麗な音楽だわい、とお思ひになるんじゃないですか。いやあ、なんとも素晴らしい調べだ、つてお声を挙げるんでは。忠義な僕の申し上げることをもう信用なさらないちゅうなら、神様にお助けを願わなくっちゃ」。——こう言うなり、ジーギスマールは我を忘れてぱつと飛び起き、部屋の真ん中に膝を突くと、さめざめと涙を流しながら、両手を天に差し伸べてこう叫んだ。

「おお、公明正大な神様、あなたは燕に目を汚されたトビアが明らかに見えるようになすつた。⁽³⁷⁾ あなたの聖霊は、使徒方が舌を振るって語ろうとした時、光明をお授けになった。⁽³⁸⁾ どうか手前の気の毒なご主人をお憐れみになり、お目を開いてやってください。そしてあの化け物からお心をお守りください。その代わりに手前を生贄にお召しのほどを。ご主人の魂がそれで救われますなら。しかあれかし。」——こう彼が祈り終わると、感動した騎士は忠義な郎党を助け起こし、胸に引き寄せた。

「手前があなた様のためにお祈りしたことをお約束なされ」とこちらがまたしても懇願。

「何も約束できぬ。わたしはしかと言ひ交わしたのだ。なんぞ別の約定が見つかるまいか」とアルフレートが応じる。

「ええ、ええ、見つかりましょうて」とジーギスマール。「見つかりましょうて。九日後には、あなた様のご遺骸がな。皆の衆が長い鉄鉤でそれを泉の中から引つ張り出しましてのう。見つかりましょうて——見つかりましょうて。そう言うなり彼は部屋から出て行つた。

恐れと愛のいずれに就くとも定めかね、心落ち着かぬまま騎士は長いこと臥所で輾転反側。^{かじど}翌朝遅くに目覚めると何もかもご大層な夢、不吉な前知らせと結び付いているかも知れない夢だったような気がした。——やがてもう一日経てば下弦の月となる時が。すると城門の外で幾つもの喇叭が高らかに響き、花冠を被り、みごとな紋章と装身具で身を飾った数人の伝令官が馬を乗り入れて来た。騎士たちが顔を揃えると、伝令官の一人がよく通る声でこう叫んだ。「お聴きあれ。明日という日はグライヒエン伯爵様のご婚儀の祝いと定められたる日日の始まりでござる。この日厳かに行わるるは十二の宝飾を褒賞とする馬上槍試合なり。馬上槍試合が終わればいとも愉しき晩餐が、更にその後は祝宴がこの日の締め括りとなりましょう。これにはご来賓の皆様方、並びに、その余の、同等の家柄にして非の打ち

所なき、試合参加資格をお持ちの騎士輩はどなたも招かれております」。伝令官たちが去ると、騎士たち、従士らの間に喜びと期待が改めて湧き起こった。

さて、アルフレートはこれに赴くべきか。なにしろ明日は美しい女とのまたの逢瀬となるはずの下弦の月。あちらへ行き、彼女には待ちぼうけを喰わせ、二度とその姿を見ないでよいのか。それとも、祝祭初日に欠席でよいのか。そのためにこそかくも長い間に留まっていたのに。もし彼が不参となれば、騎士たちは彼のことをどう思うだろうか。

こういったたぐいの疑問の数数をアルフレートは自身に投げ掛け、何としたものかとつおいつ考えて苦しんだ。従士にはあえて訊ねはしなかった。ジーギスマールの助言は分かりきっていたからである。すると理知が助太刀してくれた。まこと恋と申すものは人に発明の才を与えてくれる。そうだ、わたしは、と彼は独り言ちた。夕刻馬でミュールベルクへ戻って来ればよいではないか。それでも馬上槍試合に出場することができる。かの麗人の足許に嬴た褒賞を置くことが叶えば、わたしはどんなに幸せだろう。

グライヒェン城の中庭に設えられた高い棧敷にはテューリンゲン国の冠を飾るこよなく美しい宝石であるたくさんの華麗な奥方たち、たくさんのなんとも愛らしい令嬢たちが綺羅星のごとく並んでいたが、東洋の花花が絢爛豪華な点で——なにせそれらを彩色するのは南国の灼熱の息吹なのだから——ご当地産を凌駕するように、それら女性のうちで最も麗しい花、メレクザーラが一際光り輝いていた、彼女は自身お手づから褒賞を授けようとの御意。

アルフレートは威風堂々たる騎士輩の中にあっても颯爽と抜きん出ている。そこで飛び切りの美女らの注目の的となったが、心はただ一人に捧げる愛に溢れていたから、こうした麗人たちなど見向きもしない。纏う鎧は陽光に明るく照り映え、強壯で丈高い戦馬は逸つて嘶き、新たに燃え上がった尚武の焔が騎士の両眼から閃く。

「ゼリンデ、誉れを」が彼の短い標語。胄に翻すのは銀糸を織り込んだ青い布紐で、これは一本の紅薔薇を包む二本の輪結びを象る。——かくして、烈烈たる功名心を胸に彼は、闘技場へ駒を進めよ、との合図を今か今かと待ち構えた。

高らかな喇叭の吹奏、釜型太鼓の連打、白い杖を高く掲げる伝令官。馬上槍試合の開始である。一組、また一組、騎士たちが互いに馬を駆り立てれば、槍は砕け、闘士らはよろめき、かなりの者が砂中に落馬。アルフレートはしからず。こうした競技に熟達している彼にも、ここで勝ちを占めるのは容易くはない。なにせ勇猛果敢な雄雄しい騎士らが彼と勝利を競ったから。だが、彼が打ち勝てなかつた者は多かつたにせよ、だれにも負けはしなかつた。馬上槍試合が終了。城主を先頭に騎士たちが広間へと並んで進む。そこでメレクザーラが褒賞を頒かつたのである。観音開きの扉が開くや、周りに居並ぶ上臈方が騎士輩の鄭重な挨拶に応え、花花、花冠、そして布紐の数数が勝利者たちに降り注ぐ。——伝令官が声高らかにその故国の名称ともども第三位として勝ち名乗りを告げたのは我らがアルフレートだった。彼はおすおす顔赤らめ、かつかと頬を火照らせて、黄金で飾られた玉座に他の者同様近づく。そこで、豪華な東洋の盛装を身に纏い、清らかなんばせに妙な温雅さを湛えた、あらゆる王の息女の中で最も麗しい女性が、一筋の純金の小鎖と、一振りのみごとな剣を褒賞として彼に差し出した。こちらは世界の花にあえて目上げることもできない。彼女をエジプトの砂地から己が婚姻の愉悦という薔薇の園に移植したのは幸せなグライヒエン伯爵である。そこでこの姫君は見事に繁茂した。もつとも、伯爵は彼女から世継を得ることはできなかつたが。喇叭が鳴り響いて晚餐へと請じた。果てしもなく並んだ食卓には当時美味珍味とされた品品が残らず配膳されていた。現今の美食家だつたら少なからずけちを付けたかも知れない。しかし、騎士輩は大いに満足し、奥方たちや令嬢たちの息災を祈って、経巡る高脚杯を幾度となく乾したのである。

ここ上座で騎士たちがしている通りのことを、下座の部屋部屋で従士たちが履行。歓楽を盛り上げる堅琴弾き、曲芸師、道化役にも不足はない。大部分の者は手早のクルトの物語を傾聴。この男の十八番は、本当にやった冒険に何百も尾鱈を付け、それらを真実と娶せること。こうすると完全無欠なものに仕上がるので、聴き手は彼の言うことをそっくり信じ込んでしまうわけ。かかる愉快な才能は最後の世でも多くの人人に受け継がれた。自分の楽しい物語を信じてもらえるとすぐ嬉しがるこうしたぐいは、大抵善良で無害な御仁である。——別の食卓の上手に鎮座しましたは我らがジーギスマール。その鼻には甘美な安息の先駆である酪酩の夕焼け色が既に拡がっており、兆し始めている本体「甘美な安息」と競合しようとしている様子。彼は彼なりに、尊敬すべき食卓仲間を陽気に楽しませようと誠実に自分を尽くしたのである。そしてなおもこれを続行。いろいろ妙ちきりんな調子でごちゃごちゃと歌ったりお談義したり、これになんともおもしろおかしい身振り手振りを添えて、哄笑する大一座を廻りに集めていた。

さて、ここまでよくぞご辛抱くださった読者のあなた、騎士たちが何を食べていたとか、どんな葡萄酒を飲んでいたとかいったことをお話ししようとしたら、おつそろしくご退屈ですよね。それから、列席者ご一同の名簿をご披露することだつてできるんですが、我らが素朴な昔話に歴史的信憑性を賦与するつもりはありません。我らが誠実な語り手もこの点黙過いたしましたように。——そうこうするうち舞踏が始まりましたよ。いとも華やかな雑踏をほんのちよつぱり覗いてみましょう。あれえ、あのきらびやかに装った堂堂たる若い騎士はいつたいたれだろう。明るく照明され、花綵で飾られた広間のあその端で、愛すべき天界の姉妹たる無垢と快活さを頬に湛えているどこぞの優雅な令嬢がひそひそ囁くのに耳を傾けているあの騎士は。

や、これはしたり。これぞ他ならぬ我らが勇士その人ではないか。気の置けない雑談の陽気な一くさりに夢中になり、おしゃべり屋さんの丹花の唇から漏れる甘い言葉に聞き惚れて、今のところ森も小川も泉の女王もすっかり忘れ

果てているようだ。淡青の衣装を纏い、銀の刺繍を施した面紗を垂らし、髪に睡蓮の花冠を被っているあの令嬢はだれだったつけ。はて、分からぬ。——数挺の提琴が素晴らしい舞曲を奏で始める。何本もの横笛がこれに加わる。かしこでは騎士は法外の悦びに恍惚としてひらひらと踊る。乙女の暗色の巻き毛がまばゆいばかりのうなじに波打ち、その相手の踊り手の目が歓喜にきらめき、兩人の頬がますます赤く火照るさまよ。——もうこの日の最後の刻限に入っている。陰鬱な雲の彼方に下弦の月が昇って行く。釜型太鼓の連打、喇叭の吹鳴、シャルマイと横笛の歓呼はいや増しに陽気に、輪舞は広間狭しとばかりなおも軽快にぐるぐる廻る。歓喜に酔い痴れた騎士は戯れ掛かる令嬢の手を更に熱烈にひそやかに握り締める。折しも、お名はなんと言われる、と優しく訊ねようとした時——あれあれ、これはいかなこと。騎士が蒼白になったぞ——手がもう一方の手の指環にびくりと伸びる。そこに激しい痛みを感じたかのように。突然令嬢の手を放すと、びっくりして目を睜るのにも構わず、広間から飛び出し、轟しく歓呼の声を挙げている千鳥足の従士どもの一座に押し入る。「ジーギスマール」。その叫びは死人を墓場から呼び覚まさんばかり。仰天した従士たちは後ずさり。死人のように蒼褪めた顔から両の目は爛爛と輝いて周囲を睨め廻す。「ジーギスマール」。もう一度叫ぶ。従士たちはだんまりの身振りで床を指す。さよう、かのりっぱな御仁はどうやら食卓の下に横たわり、幾人かの飲み仲間と闘の競争。騎士はせわしなく彼を引き起こし、揺さぶって、「わたしの馬はどこだ」と目を覚ましかけた男の耳に雷鳴のような声で怒鳴る。こちらはと申せば、目を擦り、呂律の廻らぬ口調で跡切れ跡切れに「それは——手前——さっぱり——存じません」。そこで騎士は手荒く家来の体を放り出し、自ら燭を一本手に取ると、急いで厩に赴き、間もなく愛馬を発見、これを外へ牽き出すとひらりとうちまたがり、城門の番兵に開門するよう声高らかに命じる。門が開くと、騎士は猛然と城外へ疾駆。物の具は何一つ携えず、鞍も置かぬまま、頭には羽飾りを付けた軽い縁無し帽を被っただけ。

さながら突風が野路をしゃにむに進むがごとく、さながら森の小川が轟轟と泡立ちながら絶壁から絶壁へ流れ落ちるがごとく、さながら雲の影が跡形もなく畑の上を掠めて行くがごとく、駿馬の蹄は露に潤う草の葉にほとんど痕を残さない。

既にアルフレートにはもはや遠からぬ泉に月影がきらめくのが見える。拍車を当て続けると、駒は口に泡を嘔み、呻き、騎士を乗せたまま突然くたくたと大地に崩折れてしまふ。こうなつてはこの善良な動物を氣遣うゆとりもなく、彼は徒歩立ちで前進する。かように幻影を追いかけ、そのために己の最上の宝が台無しになるのを一顧だにせぬ者は世に少なしとしない。裕福な女性に求婚し、妻と楽しく生涯を送ろうと思う人間はけっこういるが、あわれ、つらつら眺めてみると、つまり、ものの十五年もともに暮らしてみると、こりや、女悪魔の祖母様にも比すべきメガイ(4)ラみたいだわい、となるのが落ち。聖なる契りを結ぶ時、新婦が既にいくらか歳を喰つていたのならなおさらで、そうなるご亭主殿にとつては遺憾ながらにも迅速に結婚が怨恨になつてしまふ。——騎士はもう村に到着した。明るい星のような何かが泉の汀で輝いている。近寄つてみるとそれがゼリンデだと分かる。黄金の巻き毛の頭にはきらめく百合の花冠を載っている。——「それではわたしはまだ愛する女に逢えるのだ。天国の門よ、まだ閉じないでくれ」。騎士は喜び勇んでそう叫ぶ。その時鐘楼からゆつくりと悲しげに十二の響きが夜のしじまを破る。驚愕のあまり彼は呪縛され、口を開けて耳を澄ましながら凝然と立ちすくむ。姿は動き出し、両の手を彼に向けて差し伸ばす。嘆息が彼の許にまで届く。彼は恋人を抱き締めようとしたが、彼女は目の前で湿潤な住処に沈んで行く。アルフレートは己が身に何が起こつたのか分からなかつた。長いこと考え込み、夢を見ているのだ、と思つた。「ゼリンデ」。苦惱に心も千千に乱れた彼はとうとう叫んだ。「ゼリンデ」と飴が返る。「わたしはいとしいそなたに永遠に逢えぬのか」。「逢えぬのか」と山中で朗らかな声が嘲る。「姿を見せてくれ、いとしいひと。聴いているか。戻つてくれ。——

「戻らぬのか、二度と再び」。「二度と再び」。アルフレートの叫び通りに悲しい反響が返る。彼は大声で嘆き、かきこいだ。しかし、何百回叫ぼうと、彼女には聞こえない。おしまいなのだ、そう彼は感じる、喜びの種になったであろうことがなにもかも。さりながら——まだ薔薇色の希望があるのではないか。彼女の指環が。——そう考えた途端、指環はもう深処へ沈んで行く。そして木木の間でさらさら、ひそひそと柔らかに漂う、アイオロスの豎琴（ハルフェ）にも似た調べが耳に入った。そして水面には小さな波紋が幾つも拡がり、清らかに澄んだ声が白銀の響きのように歌うのが聞こえたのだ。

タンネンヴェルト、ああ、あなた、

あなたがあわれ殺したのは、信実（まじと）捧げし心意気。

このゼリンデの生き甲斐はもはや虚ろ（うろ）になり果てて、
嘆く相手は花ばかり。

日暮れが可愛く頬を染め、

星が御空（み）できらめけば、

私を捨てたあなたを想い、

夢見るはいずこかの楽園。

予言をいとも厳しく果たす、

運命の書に書かれたは、

「百年の内ただ一度、

薔薇が咲く時、私は恋することが許される。

その恋人が自らと私にとくと

信実まことをば貫くならば、ゼリンデは

水の城から永遠とわに出て、

「こよなきもので彼に報いる」。

もはや全ては過ぎたこと。

あなたはいとしくあなたを抱いた

女に再び逢えはせぬ。

うっとりあなたの目を見つめた

女はあなたを身許に引けぬ。

空むなしく嘆く私の唄、

この身の指環を、アルフレート、どうかなにとぞ大切に、

これは危険と苦難からあなたを守り、そしてまた、

死に至るまで信実まことを貫く。

声は黙もだしたが、横笛フリューテの音色はそよ吹く夜風の中で低く震え続けた。さながら彫像のように騎士は立ちすくむ。たゆ

たい去つた調べとともに正気も消え失せたかの様子。すると突然指環が水の奥津城を出て、自分からアルフレートの指に戻つて来た。

「死に至るまで信実を貫く」。——締め付けられた胸裡の思いをとうとうほおつと吐き出した彼はこう呟いた。「あ、なぜわたしもこのように彼女に信実を貫かなかつたのか。ジーギスマールの言うように、恋の代償に命を差し出さねばならなんだとしたところで。彼女の腕の中で死ねば、甘美な死ではなかつたか」。彼の苦悩は暖かな涙となつて溶けた。ひっそりと泣きながら、一本の樹に寄り掛かり、限り無い別離の痛みを受け入れつつ、彼は澄んだ静かな水をじつと見下ろしていた。

一方、彼の蒼惶たる退出ぶりは騒ぎを巻き起こしていた。彼がともに踊つたあの見知らぬ令嬢も同時に姿を消したのである。急いで騎士の後を追う者、何が起こつたのか従士たちに訊く者。彼らは曖昧な言葉でしどろもどろに事態を陳述。忠義者のジーギスマールも突然かなり素面になつていた。しかし、主が夜闇を突いて城外へ騎馬で出掛けたことを思い出したり、聞かされたりした彼は、わつと泣き出し、主を探しに出て行こうとした。引き留められると、なんとも物狂おしくふるまい、罵つたり、泣いたり、祈りを捧げたり。ご主人はいつたいどうしたのか話せ、と四方八方から責め立てられ、強制され、心配されると、やつとのことで主の恋について知っている限りをしゃべつたもの。よもや、とばかり一同目を見交わし、あきれたり、にんまりしたりで、一人また一人と彼に背を向ける。引き留める者かものはやいなくなると、彼は城門から飛び出し、山を下り、泉目掛けてまっしぐら。暫く走ると目にしたのは、道の真ん中に突っ立っている丈の高い黒い代物。奇妙な具合に首を振っている。「なべての良き精たちよ」と大声で叫び、三度十字を胸に切ると、妖怪は嘶いて、こちらに跳び掛かつて来るではないか。勇ましいジークマールは地べたに倒れた。けれども、別に鉤爪がゆっくり頸を振じろうとうなじに触れて来たわけではないに気付くと、勇気を奮

い起こして、ぱつと立ち上がった。するとなあんだ、これはアルフレートの馬で、一旦斃れたのが元氣を取り戻したのだった。しかし今度は新たな恐怖に襲われてぞつと震え上がる。これはけだしこういうことではないか。ご主人は生者の領分から姿を消して、おぞましい愛人の地底の宮殿に降り、ジーゲスマールは置いてきぼりで、懐かしの故郷から遠く遠く離れた異国にたった独り取り残されたのだ。——彼は暗澹として苦い傷心に身を委ねた。善良な動物も全く同じ気持ちで首うなだれて悲しみを分かつかつ風情。それでもジーゲスマールはとにかく泉に行ってみることにした。主の水の墓の上に何本か花を撒き、そこに十字架を建立しよう。馬を牽きながら泉に向かったが、夜の陰鬱な戦慄に襲われる。月は雲の背後に隠れており、巖の裂け目に帰る。梟が黒黒とした翼をばさばさと羽搏かせて頭上を飛び去り、崩れた廃墟から木梟が嘎れ声で単調に「来う」と啼き続ける。しかしジーゲスマールは不退転の勇氣で足を踏み締め踏み締め前へと進んだ。身も心も神様にお任せして。目指す場所に辿り着くと、不気味な深処の畔に立つ。「おお、アルフレート、アルフレート・フォン・タンネンヴェルト」。彼は大きな声で嘆息した。——と、その時、まどろんでいた騎士ははつと夢から覚めた。陰鬱な雲の縁が白銀の弧となり、月が皓皓と輝きながら姿を現した。心底からの喜びに高らかな歓呼の声を挙げた忠義者は、驚いた騎士の足許にどつと跪く。

「それじゃあなた様は水妖姫のなんとも可愛らしい鉤爪に捉まらなかつたんですね。神は頌むべきかな」とこちらは有頂天。けれどもアルフレートは厳かに口をつぐんだまま従士を見つめ、やがて、ともにこの場を立ち去ろう、と合図した。

「ミュールベルクへ上がれ」。彼は暫くしてこうジーゲスマールに命じた。「そして旅の準備を調べよ。神の思召しなら、明日わたしはこの地を去る所存だ。ここでは小川を見ても花を見ても失くしてしまつた幸運を切なく思い出すことになる。わたしは今一度グライヒェンに赴くが、すぐにおぬしと落ち合おうぞ。——こう言い終わると彼は

馬上の人となり、グライヒェン指して疾駆した。物見の塔上の祝いの篝火が彼の恰好の道しるべ。一方ジーギスマールは、すてきな愉悅の源泉が乾上がることのなさそうなこの界限に別れを告げるのは辛かつたけれども、機嫌よくぶらぶら山を登って行った。そしてこんな鼻歌を歌った。

殿は騎士様、おいらは従士、

殿が好きなは戦いで、おいらが好きなは酒盛りよ、

殿はいくとも槍を折り、おいらはいくとも壘を折る「酒壘を飲み干す」、

殿は生きてる、おいらは満足。

アルフレートがグライヒェン城の広間に足を踏み入れると、衆目の的となった。ここに集っている人人の間にひそひそとした囁き、耳こすりが起こる。上臈方はこっそり彼を見送ったが、ひどく抑えた声で、水妖の騎士、と言うのが幾度か彼の耳に入る。これを聞いた彼はむすつと唇を噛み締めた。ほんの二言三言で時ならぬ辞去の詫びをし、鄭重なもてなしに与った礼を言い、礼式通り別れを告げる彼を、城主は懇切な言葉を尽くして引き留めようと努めたが無駄。ある誓言に縛られておりまして、と彼は応え、懇慫に二人の奥方に暇乞いをし、何人かの騎士と握手を交わし、皆に向かって無言で再び一揖——そして彼は立ち去った。残された人々には彼のことを好きなように取り沙汰させておいて、暫くの間なお我らが勇士の後を随って行きましようね。彼はミュールベルクに辿り着くと僅かな休息しか取らず、翌日、日の出の三時間後にはもう城山を馬で下って行く姿が見られた。黙々と、物思いに耽りながら。盾からは紗の喪章が靡いている。ジーギスマールもいささか意気銷沈の態。何度も振り返っては遣る瀬無い目付きで、

まこと心地よく過ごさせてくれた三グライヒエンを眺める。用心深い彼は、乗っている強壯な戦馬(49)の鞍の両脇に糧食の詰まった大きな籠を提さげていた。彼が補給を失念することは決してない。こうして二人は無言のままあてもなく、昇る太陽に向かって進んで行った。

さて、このあとまだ残っているのは、親愛なる読者のあなたに、よくまあ辛抱強く全部読み通してください、とお礼を申し上げる事だけ。物語のどこかしらで、けっこうおもしろいじゃないの、とにっこりして戴けたのなら、心底嬉しゅうございます。そして、お望みとあらば、またいつか、その後アルフレート・フォン・タンネンヴェルトの身の上を起こったこと、それから水の花嫁を失ったがために蒙った傷心から彼がいかにして漸く立ち直り、慰められ、彼女の思い出が徐徐に色褪せたかという次第を、お話しいたすかも知れません。

さりながら、泉より今もおひそやかに、

静けき夜、望月の輝きの明るさに、鳴り響くは

豎琴の音色のごと、挽ひき歌の調べにも似て、

軽やかな影どものたゆたうは畑はたの畔くろ。

泉には水の輪の幾重にも拡ひろがりて、

星屑は穏やかにたゆたいてきらめきぬ。

ゼリンデは嘆き歌えど、ゼリンデは嘆き歌えど、

よしなしや、よしなしや、かの騎士は帰り来たらず。

原注

- (1) 睡蓮スイレン Wasserosse⁽²⁸⁾ ニンファエア・アルバ・リンネ *Nymphaea alba* L.
 (2) 水金鳳花スイキンポウカ Hahnenfuß⁽²⁹⁾ ラスンクルス・アクアティクス *Ranunculus aquatilis* およびステラトウス *Sceleratus*。
 (3) 白屈菜シロツツメ Goldwurz⁽³⁰⁾ リリウム・マルタゴン・リンネ *Lilium martagon* L.
 (4) 和蘭葛蒲ワランカクボ Allernaharisch⁽³¹⁾ アリウム・ウイクトリアリス *Allium victorialis*。
 (5) 車葉草クルマエダス Waldmeister⁽³²⁾ アスベルラ・オトラータ *Asperula odorata*。
 (6) 民話「メレクザーラ」『ドイツ人の民話』第五巻 *Volksmärchen der Deutschen. 5ter Band*。

訳注

- (1) 三グライヒェン *die 3 Gleichen*。テューリンゲンの古い町ゴータとアルンシュタットの間にある三つの、互いに近接している城山、ヴァンタースレーベナー *Wandersleben* (あるいはヴァンタースレーバー *Wanderstieber*)・グライヒェ *Gleiche* (現代ではグライヒェの城 *Burg Gleichen* で通っている)⁽³³⁾、その南のミュールベルク、ミュールベルクの東のヴァクセンブルクを三グライヒェン *die drei Gleichen* と称する。テューリンゲンの豪族グライヒェン伯爵家は、その一番目の城山に因んで名づけられた。この城がおそらく一〇八八年古文書にその名が挙がっているグライヒェン城であり、トンナ伯爵家の分家がこの城主となって、グライヒェン伯爵と名乗ったのである。一五三九年には既に完成していた二人の妻を持った伯爵の伝説で有名になった。この伝説はエアフルトの大聖堂にある墓石と結び付いている。ムゼーウス (後掲訳注「ムゼーウス」参照) はこの伝説を素材として大人向きとも言えよう長編メルヒェン「メレクザーラ」を書いた。
- (2) ムゼーウス *Musäus*。ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス *Johann Karl August Musäus* (一七三五一—一七八七) はザクセン・ヴァイマル公国の首邑ヴァイマルの古典語中高等学校教授。知る人ぞ知る十八世紀後半に活躍した文人で、その代表的個性メルヒェン集『ドイツ人の民話』は十九世紀を通じてドイツ語圏で名が高かった。(詳しくは鈴木満刊・注・解題「リュエーベツァールの物語」ドイツ人の民話『沈黙の恋』ドイツ人の民話『メレクザーラ』ドイツ人の民話』——いずれも国書刊行会刊——をお読みください)
- (3) ミュールベルク *Mühlberg*。テューリンゲンの町。二〇〇六年現在人口四〇〇〇〇足らず。多くは赤い屋根の、絵のように美しい家。土地の人は、テューリンゲン最古で一三〇〇年の伝統がある、と誇る。もともとその名が文書に見えるのは一二二六年とか。一二三〇年マイセン辺境伯領。次いでブランテンブルク辺境伯領、それからボヘミア王国領に、一三九七年以降再びマイセン領となり、更に移り変わりを重ねて、一八一五年プロイセン王国に帰属。町を見下ろす丘の上に城の廃墟があり、これは三グライヒェンの一つ。
- (4) 微風 *Zephyr*。航海に頼るギリシア人に最も恐れられていたのは秋の末から春の初めまで勢い烈しく吹きすさぶ荒荒しい北風。その反対

に優しいのがゼライロス。春の季節の微風である。ギリシア・ローマの古典文学の伝統から西欧の文人は「ゼファ」(英、「ツェーフィル」)(独)、「ゼフィル」(仏)を快い微風、軟風の意味で用いる。

(5) かの魅惑的なサラセン女性 (ムゼーウスによれば) エジプトの王マレク (ムゼーウスは「王」Sultanという称号も用いているが、前者の方が歴史的には正しい) アル・アージズ・オトマンの息女メレクザーラ姫。サラセン人は、中世初期キリスト教徒の著作家たちにより誤まって全てのアラビア人に対して用いられ、後にはイスラム教徒全体をも指すようになったヨーロッパ人による呼称。

(6) 聖地 エルサレムを中心とするパレスティナのこと。グライヒェン伯爵は、教皇グレゴリウス九世に強制された神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世が一二二八―二九九年に(第五回)十字軍(いわゆる無血十字軍)を編成した際、直接の主君テューリンゲン方伯ルートヴィヒ(しかしながらまだイタリアの地ヒュドゥルントウム(現在のオトラント)にいる間に病死)の旗印の下これに参加、パレスティナの港湾都市アッカ近郊の陣営に入った。しかし、この地でサラセンの偵察軍の俘虜ふりよとなり、エジプトの首都カイロに送られ、その地で奴隷とされた(とまあ、ムゼーウスは「メレクザーラ」で物語っているわけ)。

(7) 貞淑な奥方エリーザベト sein treues Ehwewb, Elisabeth。しようがないなあ、若きベヒシュタイン君、そんなに愛読者だったのなら、ムゼーウスの物語「メレクザーラ」の詳細をちゃんと覚えてなくっちゃ。グライヒェン伯爵エルンストの奥方はオットーリアとなっているよ。エリーザベトは彼の主君第六代テューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世のお妃で、後のあの有名な聖女エリーザベトでしよう。

(8) 時ハ移ロイ行キ、ウンヌン tempora mutantur etc. ラテン語。全て記せば、時ハ移ロイ行キ、我ラソノ中ニテ移ロウス。 tempora mutantur, nos et mutantur in illis. この六脚韻詩は出典は明らかではないが中世が源らしい。もつとも、韻律は正しくない。

(9) 地域 Gau。元来は「水辺の肥沃な土地」の意。のち古代ゲルマン人の行政単位。また、地方・地域。

(10) 馬上槍試合 Turner。ドイツ語では普通「レンネン」Rennenもしくは「シュテツヒェン」Stechenである。フランス語「トゥルノア」tournoi、英語「トーナメント」tournament。中世の騎士たちのお気に入りの遊びの一つ。十一世紀のフランスで完成。十二世紀には既に西欧に広く普及していた。完全武装して戦馬にまたがり、盾で上半身の片側を蔽い、長槍を構え、闘技路の両端から突進して、相手を鞍から突き落とすとした方が究極的な勝利。両者とも踏み堪えれば再試合となる。落馬しないまでも、鎧から足を外せば敗北。この他一定の規則がある。また、集団で行う勝ち抜き戦もあった。いずれにせよ鋼鉄の鎧や冑を激しく突けば、槍の木製の柄は折れる。突き当てるのが試合巧者の証拠だから、「槍を折る」「槍を砕く」は名誉なことだった。本当の穂先の代わりに先端に平たい円盤を付けた「礼儀の武器」と呼ばれる槍を操る模擬戦が普通だったが、中世の幾つかの絵には、真槍を用いている情景も描かれている。「礼儀の武器」を用いた場合でも、甲(冑の一部)で上げ下げできる顔隠し。閉じた場合、縦に並んだ幾つかの細い隙間から外を見る)の隙間から折れた鋭い木片が入り、これが目から脳を貫いて死に至った事例がある(一五五二年フランス国王アンリ二世が、モンゴメリー伯の槍により)。なお、試合を開催するのは王侯や大貴族で、勝利者には

黄金の月桂冠などの褒賞が用意され、試合の女王に選ばれたしかるべき貴婦人の手から誉ある騎士に渡された。

(11) アルフレート・フォン・タンネンヴェルト殿 Herr Alfred von Tannenwörlt。「ヴェルト」Wörlt、「ツルト」Wurth は古語で「地所、土地」の意(古英語 word)。「タンネンヴェルト」は「樅の樹が生い茂っている地所」。

(12) リューゲン島 Insel Rügen。ドイツ最大の島。面積九二六、四平方キロ。バルト海のポナムメルン沿岸にある。狭隘なストレーラ海峽によって大陸と隔てられている。リューゲン島には最古ゲルマン人が居住していたが、民族大移動の折スラヴ人に占有され、独自の君侯に治められていた。一六八八年デンマークの統治下に入る。そうこうするうち完全にドイツ系が定住ようになっていた島は、一三二一年に締結された相互統制約に基づき、一三二五年ポナムメルンヴォルガストに属し、一四七八年ポナムメルンと統合、一六四八年スウェーデン王国、次いで一八一五年プロイセン王国の手に落ちる。現在、美しい観光地、のどかな保養地として人気が高い。ムゼーウスの「愛神となった精霊」冒頭はここが舞台。ベヒシュタインはこの物語も踏まえていよう。

(13) 従士 Knappe。後に出る盾持ち Schildknappe もこれと同じ。しかるべき家柄の子弟で、騎士見習いとして修練しながら、主人の騎士の身の廻りの世話をする若者(従騎士)を指すこともあるが、ここでは平民出身の従者。ムゼーウスの物語「ローラントの従士たち」の主人公である三人の従士も素性・行動からしてこつちの方。もつとも英仏百年戦争の時代には、平民の兵士でも数数の戦功を揚げて従騎士となり、やがて騎士に叙任された豪の者が少なからずいたようである。

(14) プロイセン Preußen。現在この名称は抹殺されている。元来ドイツ民族の神聖ローマ帝国の圏外にあったこの地方(現ポーランド共和国領)は、ドイツ騎士団が十三世紀の二〇年台以来スラヴ人を圧倒しながらキリスト教布教の名の下東方へ侵攻するにつれ、ドイツ人の居住領域となったもの。一七〇一年公国からプロイセン王国(離れてはいるが、同君連合であるブランデンブルク選帝侯国の選帝侯フリードリヒ三世が、一七〇一年ケーニヒスベルクに赴いて即位式を挙げ、プロイセン(での)国王 König in Preußen フリードリヒ一世となった。しかし、この王号はプロイセン国内においてのみ認められるものだった)に昇格。しかし対外的にも認められる王号として初めてプロイセン国王 König von Preußen を名乗ったのは、フリードリヒ二世(一七二一—一七八六、大王)。彼はプロイセンとブランデンブルクとの間の広大な地域を(たとえば西プロイセンを一七七二年第一次ポーランド分割により)奪取、両国の領土的連結を達成したのである。この連結以降プロイセンはドイツ本部の大部分を占める王国名となる。この王国はヨーロッパ第五の軍事大国でもあった。統一ドイツ帝国の誕生(一八七二)は、プロイセンとフランス(第二帝政)との戦いであるいわゆる普仏戦争に前者が勝利したことに起因する。第一次世界大戦後はドイツ共和国を形成する自治権を持つ自由国。ナチス時代には一行政区画に過ぎなくなり、第二次大戦後は連合国ドイツ管理委員会から解消を命ぜられ、一九四七年以降地方名としても存在しない。ただし、ベヒシュタインがここで「プロイセンの海岸」と言っているのは、一八二〇年台初頭のプロイセン王国の海岸を考えているに過ぎない。リューゲン島の対岸はこの物語の時代ポナムメルン公国領か。

(15) ジーギスマール Stegsmar. 「ジーギス」は「ジーゲス」Seggs、つまり「勝利の」か。「マール」は未詳。

(16) ニコチアナ・タバカム Nicotiana tabacum. 煙草。茄子科の一年生草本。南アメリカ原産。煙草と喫煙についての情報をヨーロッパに最初に齎したのはクリストフコロ・コロンボ(コロンブス)だが、詳細を記したのはイスパニアの聖職者にして歴史家ベトルス・マルティル(一四五七—一五二六)で一五二一年。一五六〇年以前に種子がポルトガルとイスパニアに到来、医師ニコラス・メナルデスが素晴らしい葉草として礼賛、フランス大使ジャン・リコがバリへ種子を送った。煙草という植物が初めてフランスからドイツ(アウクスブルク)に入ったのは一五六五年のこと。喫煙の習俗は一五五〇年頃イスパニアに、次いで、一五七二年カリブ海で暴れ回った英国の航海者(後にサー・)フランシス・ドレイク(一五四〇—一九六)の手の者によって一五八三年英国へ輸入され、この地の宮廷人の間にパイプでの喫煙が広まり、間もなく公共の喫煙ハウスもできた。

(17) グライヒエンの城山 Der Burgberg von Gleichen. グライヒエン城は十一世紀に初めて「カステルム・ゲリコ」castellum sichoとして文書に言及される。当時はオルラムムンデ伯爵の所有。一六二二年当時領主だったマインツの大司教はトンナ伯爵家をここに封じた。以降この領主はグライヒエン伯爵を名乗る。グライヒエン伯爵家とエアフルト市(テューリンゲンの経済的に最も重要、かつ最大の都市。中世および近世、強大な独立性を保持していたが、法的にはマインツの大司教の支配下にあった)の間には、市側の同意無しにはいかなる戦闘も行わない、とすゝる条約が締結される。これは伯爵家の支配権の消滅と市側の支配権の増大を明白に物語るもの。既に十二世紀の初頭以降エアフルトによって市守護職および修道院守護職に任じられていた伯爵家は一三〇八年市への、一三八三年修道院への職権を放棄。一六三二年に至るまで城は依然グライヒエン伯爵家のものだったが、彼らが城に居住するのは一時的に過ぎず、多くは代官や収税吏が駐在。一六三二年伯爵家の末裔が逝去すると、城は再びマインツに返還された。一六三九年城は、三十年戦争の皇帝軍將軍ハッツフェルト伯爵の手に渡った。が、彼は手入れを閉却したので、十七世紀半ば城は既に部分的に廃墟となった。一七三〇年以降城は無人となり、ハッツフェルト家の子孫が絶えたとましてもマインツの所有に帰した。一八〇三年プロイセン王国領。一八〇六年、十四年、ナポレオン軍に占領される。一八一一年エアフルト大学に寄贈されたが、一八一六年エアフルト大学の廃校に伴い、プロイセンに戻る。その後崩壊するがままになっていたが、十九世紀半ば次第に修復工事が始まる。ゴータの公爵に売却されたあと、一九三五年エアフルトに贈呈され、現在に至った。緑なす丘の頂にぐるりと繞らされた城壁は辛うじて残っているが、建物はほとんど屋根が失われている。

(18) 歓迎の杯 Willkommenbecher. 葡萄酒や麦酒を満たした、賓客を歓迎する象徴である大杯。ただ「ヴィルコンメン」Willkommenとも言う。
(19) 例の手早のクルト der flinke Kurt. ムゼーウスが「メレクザラ」に登場させた機転の利く愉快な従士で、もう一人の、これはまことにもって無骨な乗馬兵ファイトとともに、グライヒエン伯爵とエジプトのカイロで奴隷生活を送り、ついにメレクザラ姫を入れて同行四人、うまうまとアレクサンドリアからヴェネツィア船で脱出するのに成功した男。七年間留守をしたテューリンゲンに戻ってみると、伯爵に従って出征

した折、まだ新婚はやほやだった愛しの女房殿レベツカは、たった一年しか経たないうちに法的に離婚を認めてもらい、クルトの生まれ故郷の小さな町オールドルフで市長と再婚、二人の男の子まで作って、クルトの家に住んでいた。グライヒェン伯爵の貞節な奥方オットイヤーと雲泥の相違。自分の家から叩き出されたクルトは、以来生涯グライヒェン伯爵の城に留まった。

- (20) 勿忘草 *Vergissmich*. 紫草科の多年生草本。ヨーロッパ原産。学名 *Mysotis*。高さ約三〇センチ。春夏に、巻き尾状の花穂として、藍色の小さい花をたくさん付ける。ドイツ語「フエアギスマインニヒト」は「わたしを忘れないうで」の意。いわゆるロマンチック街道の美しい小都市ローテンブルク・オブ・デア・タウバーの一端はタウバー川に臨む険しい断崖だが、ここに生えている可憐な草花を恋人のために摘もうとした青年が、これを掴んだまま転落、流されながら、「フエアギス・メイン・ニヒト」と叫んだので、この名が付いたとか。

- (21) ヴァアクセンブルク *Wachsenburg*. 三ヶライヒェンの一つ。ミュールベルクの東にあるから、ミュールベルクの住人にとって、朝日はヴァアクセンブルク城の背後から昇ることになる。丘の頂にあるヴァアクセンブルクの砦 *Veste Wachsenburg* は現在観光拠点である。どうやら九五〇年頃建設されたらしいが、この要害は初め修道院、次いで近隣の豪族の根城といった具合に転転とし、一三〇六年テューリングンきっての名家シュヴァルツブルク伯爵ギュンター七世の所有になった時、彼の下で黄金時代を迎えた。一三六九年テューリングン方伯に売却され、更に七十年後担保としてアペル・フォン・ヴィッツトウーム *Apel von Vitzthum* (一四七五) の手に渡る。この男、やがて「テューリングンの略奪者」と呼ばれる悪名高い盗賊騎士(盗賊騎士について詳しくはムゼーウスの物語「泉の水の精」の本文冒頭および訳注を参照されたい)となる。彼が法外な悪業を重ねたので、ヴァアクセンブルクは一四五一年十二月、テューリングン都市同盟に属する諸都市、エアフルト、ミュールハウゼンおよびノルトハウゼンによって攻囲され、占領された。しかしアペルは地下の抜け道を通ってまもなくと逃亡に成功。一四七二年エアフルトを攻め、その際六千の家屋が修道院、教会もろとも劫火の犠牲になった、という。前述したようにムゼーウスは「泉の水の精」冒頭に盗賊騎士を登場させている。これはシュヴァーベン(原文「ディンケルスビュール」近郊の城主ヴァッカーマン・ウールフィンガーという設定だが、テューリングン人ムゼーウスの脳裡には、あるいは、アペル・フォン・ヴィッツトウームの事跡が俯しているたかも知れない。一九〇五年ヴァアクセンブルク城は徹底的な補修を加えられた。現在、城の一部、本丸と婦人部屋は小さなホテル(「フェステ・ヴァアクセンブルク」)になっているが、あとは往昔を偲ばせる遺構を見物することができる。

- (22) どうやら *auf der andern Seite*. 普通は「一方では」の意。 *auf der einen Seite* も同じ意。しかし、この物語では双方合わせて五箇所で使用されているにも関わらず、いずれもその意味では当て嵌まらない。そこで類推してみた。となたかご高教を。

- (23) どうやら *auf der andern Seite*. 前掲訳注「どうやら」参照。

- (24) ミシユルミー *Mischurumi*. いや、豪胆な徒士殿。手早のクルトの言い間違いか、貴殿の聞き違いか、それとも(どうやらそうらしいが)

原作者ベヒシュタインの誤りか、よく分らないけれど、ムゼーウスは「メレクザラ」の中で「ミシュルーミー」ではなくて「ムシルーミー」Muschiumi」と記していますよ。こりやあ音位転換ですね。この花は、ムゼーウス自身の原注によれば、ヒュアキントゥス・ムスカリ（にくすくくヒュレンシス）、肉豆蔻風信子）。

(25) 夜鶯 Nachtigall. 小夜啼鳥。燕雀目鶯科の小鳥。ヨーロッパ中部から西南部に分布。習性は鶯に似て、灌木林に多く、春、夏には早朝、薄暮、または月明の夜などに啼くのでこの名（ドイツ語の語源は「夜の歌姫」）がある。ヨーロッパでは多くの文学に取り上げられて愛されている。ムゼーウスの「愛の信実——あるいはマルブルー風お伽話」訳注参照。

(26) 円胴弦楽器 Laute. リュート。極めて起源の古い弦楽器。エジプトからアラビアを経て中世ヨーロッパに入り、十八世紀まで独奏、合奏に用いた。形はマンドリンに似、多数の弦を指または義甲で演奏。ムゼーウスの「沈黙の恋」訳注参照。

(27) 七弦琴 Lyra. 古代アッシリアやギリシアで行われた小さい堅琴。U字型またはV字型の枠の上方に横木を渡し、こことUまたはVの屈曲部との間に四弦、七弦、もしくは十弦を張る。円胴弦楽器の音色が響いたのに、泉の乙女が七弦琴を抱いているのはちと作者の用意が足りないようだが。

(28) 曙 Aurora. ローマ神話の曙の女神。ギリシア神話のエオスに当たる。

(29) ゼリンデ Selinde. 十八世紀ドイツの歌謡作者にして寓話作家、そしてライプツィヒ大学教授（詩学、弁論学、倫理学、教育学）を務めたクリステリアン・フルヒテゴット・ゲラート Christian Furchtegott Gellert (一七二五—一七六九) の作品に、こよなく美しい乙女ゼリンデとその肖像画を描いた絵描きとを歌った軽妙飄逸な譚詩「ゼリンデ」Selinde (七十一行) がある。ゲラートはいわゆる「ブレーメン寄与派」の中心的存在で、十八世紀ドイツで大いにもてはやされた『寓話と物語』Fabeln und Erzählungen (二七四—四八二)、ある女性の数奇な運命を主題とした『スウェーデンのG伯爵夫人の生涯』Leben der schwedischen Gräfin von G. (一七四七—四八二、二巻) 他多数の著書があり、当時最も人口に膾炙した文人だった。かなり後代とはなるが、若き読書家のベヒシュタインのこと、かくも名高き文人の著作に必ずや親しんだことだろう。となると「ゼリンデ」だって読んでいたのでは、では美女の名の一致は偶然ではない。そう申ししてもまず無理はあるまい。

(30) 天空の靈氣 Aether. 古代ギリシア人が考えた天空に漲る精気。生命・宇宙の根元である原素。

(31) 水の精 Ondine. ドイツ語では普通「ウンディーネ」Undine. フランス語ではこの綴りで「オンディーヌ」。ベヒシュタインの発音もそうだろう、と考えて振り仮名を振った。ルネサンス期のドイツの医師にして自然科学者、哲学者、神学者バラケルスス Paracelsus (一四九三—一五四一)。本名フィリップス・アウレオルス・テオフラスト・ボンバスト・フォン・ホーエンハイム Philippus Aureolus Theophrast Bombast von Hohenheim) は、万物を形成する四つの要素を地・水・火・風（大気）とし、その精をそれぞれ「グノーム」Gnom、「ウンディーネ」「ザラマンダー」Salamander、「ジュルフェ」Syfhe と考えた。

- (32) 地の精 Gnom. 地中に棲み、金銀玉石、鉄や銅を掘り、これを加工して素晴らしい工芸品を作る。醜い小人とされる。ただし女性形グノミテ Gnomide は美しいとのこと。人間をからかうこともあるが、大抵は親切にしてくれる。コーボルト Koboldとも言う(家の精のコーボルトとは異なる)。
- (33) 水妖 Nix. これは男性形。女性形はニクセニツ。ドイツ語圏の河川・湖沼に棲息する水の精。男の水の精は残酷で醜く、ぬるぬるしていて人肉を喰うこともある。綺麗な、あるいは普通の容姿の男性に化けて水から上がることもある。女の水の精はおおむね性質は良くて(ただしむら気)美しい。これも愛らしい女性の姿で陸を訪問することがある。
- (34) とうやら auf der einen Seite. 前掲訳注27「とうやら」参照。
- (35) 妖婦 Sirene. 複数形セイレネスは、ギリシア神話に出て来る人面鳥身の海の精で、彼女らの歌を聞いた舟人はその美声に魅せられて、引き寄せられ、海中に飛び込む。セイレネスはその肉を喰らい尽くす。従って「セイレン」は「男を滅ぼす妖婦」の代名詞。ムゼーウスの「屈背のウルリヒ」で同様の遣い方がされている。
- (36) とうやら auf der einen Seite. 前掲訳注27「とうやら」参照。
- (37) あなたは燕に目を汚されたトビアが明らかに見えるようになった トビアではなくトビトの誤り。また燕ではなく雀。旧約聖書外典トビト書。義人トビトはアッシリアの地に同族とともに捕囚の身となりながら、生涯を通じて真理と正義の道歩み、同族の死者を親身に葬るなど、常に人のために尽くして来た。妻ハンナとの間に一子トビアを設ける。しかし死者を葬った夜、家の中庭の扉の傍らで眠ったトビトの両眼に扉の上の雀が糞を落とし、それがもとで目に白い膜ができ、失明してしまった。一方メデアアの地に住む親族の娘サラは、これまで七人の婿を取りながら、つきまとう悪魔のため新婚初夜に七人いずれも殺されていた。二人はそれぞれ神に不幸を訴える。やがてトビアは父の言いだけで、メデアアの他の親族に預けた巨額の銀を受け取りに行くことになる。案内人として自薦したのは天使ラファエル。トビアはラファエルの導きと忠告のお蔭で無事に使命を果たすことができたばかりか、サラとめでたく結婚(追っ払われた悪魔はラファエルに捕らえられる)、父トビアの眼病も癒すことが叶う。どちらも神意の顕現。これは「死人報恩譚」を主題とするユダヤの民話である。
- (38) あなたの聖霊は、使徒方が舌を振るって語ろうとした時、光明をお授けになった「五旬節の日となり、彼らはみな一処に集ひ居りしに、烈しき風の吹ききたる」とき響、にはかに天より起りて、その坐する所に家に満ち、また火の如きも舌のやうに現れ、分れて各人のうへに止まる。彼らみな聖霊にて満され、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ(新約聖書使徒行伝二章一―四節)。皆ガリラヤ人である十二使徒がエルサレムで伝道を始めにあたって、聖霊が降臨し、ユダヤの一方であるガリラヤの方言で話しても、世界各地の言葉として聞こえた、という奇蹟である。
- (39) 槍は砕け 前掲訳注「馬上槍試合」参照。

- (40) 世界の花 die Blume der Welt. メレクザール姫のこと。ムゼーウスはこの姫君の名をアラビア語で「世界の花」という意味として設定した。しかし、「メレクザール」はどうか「マラク・ザフラ」であって、「花」という名の天使」となる。詳しくは「メレクザール」訳注「メレクザール」参照。
- (41) シヤルマイ ダブルリードのついた中世の木管楽器。オーボエの前身。ムゼーウスの「リュベツァールの物語」「泉の水の精」「奪われた面紗」「宝物探し」にも登場。
- (42) どうやら auf der einen Seite. 前掲訳注27「どうやら」参照。
- (43) 女悪魔の祖母様 der Satirin Großmutter. 「悪魔のお祖母さん」die Großmutter des Teufelsなる存在は、グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』Kinder und Hausmärchen der Brüder Grimm (略称KHM) ——すなわちいわゆる『グリム童話集』——の場合、二九番「本の黄金の髪を持った悪魔」Der Teufel mit den drei goldenen Haaren ではなく(悪魔の)「大おっかあ」Elternmutter ——つまり「歳を取った方のおっかさん」ältere Mutter = 「祖母さん」——なる単語で、一二五番「悪魔と悪魔のお祖母さん」Der Teufel und seine Großmutter はそのまま「祖母」Großmutterとして登場。どちらの話でも人間に優しい。このように「女悪魔Satirinの祖母」という形態は未詳。
- (44) メギイラ Megäre. ギリシア神話の復讐の女神の一柱。この三女神は、アレククトー(止まない女)、ティーシポネー(殺戮を復讐する女)、メギイラ(妬む女)。髪には無数の蛇が巻き付き、黒い衣を身に纏い、手には炬火(たきご)か笞(むち)かを携えるという恐ろしい姿。翼を生やしていることも多い。
- (45) アイオロスの竖琴 Aolsharte. アイオロスは極西の海に浮ぶある島に住む風を司る者として『オデュッセイア』に登場するが、あくまでも説話中の存在で、ギリシア人が風全体の神として尊崇したわけではない。「アイオロスの竖琴」とは、風が吹くと美しい音色で鳴るように作られた無人楽器のこと。長細い共振箱に固定された駒に、和音になるよう調律されたさまざまな太さの腸弦を強すぎないように張ったもの。
- (46) 全てのの良き精たちよ Alle gute Geister. 幽霊に出会った時に使う合言葉として、ムゼーウス「リュベツァールの物語」第五話で、ツェツィーリエ伯爵夫人の従僕ヨーハンが唱えかけている。もっともそれで跡切れてしまうので、こちらではAlle guten Geister となっている。形容詞の語尾変化の相違も文法的な興味を引くが、最後のダツッシュは本来この後にもっと呪文が続くことを示唆している。
- (47) 来う Komm. ドイツ語の「来い」。「おいで」。木鼻の啼き声がそう聞こえるとしている。
- (48) 槍を折り 前掲訳注「馬上槍試合」参照。
- (49) 乗っている強壯な戦馬 seines starken Turnierpferdes. これはおかし。従士の乗馬は強壯でよく労役に耐えるではあるが、騎士にこそ相応しい戦馬ではないはず。
- (50) 睡蓮 Wasserrose. 原文の「ザアッサーローゼ」は「水の薔薇」の意。学名ニムファエア・アルバ Nymphaea alba び、無論白び(＝アルバ)

花を咲かせる。そこで「水の百合」Wasserlilieとも。一般のニンファエアは多年生水草。大きな根茎を持ち、葉を水上に浮かべる。夏、根茎から花梗を水面に出し、頂端に蓮に似た花を開く。花は水面に浮び、直径四一五センチ、白・黄・紅など。多数の花弁がある。

- (51) 水金風花 *Habenula*. 原文の「ハーネンフース」すなわち「雄鶏の足」は、日本でも「トリノアシガタ」という別称のある金風花だが、この学名ラヌンクルス *Ranunculus* の仲間には極めて多い。水生植物もいくつもある。原注によればベヒシュタインが指しているのは学名ラヌンクルス・アクアティリス *Ranunculus aquatilis* (ベヒシュタインは「アクアティクス」*aquaticus*と表記している)である。これは水生の白い金風花で、葉が黄金色。しかし、ラヌンクルス・アクアティリスの和名が今見当たらない。一応「水金風花」としておく。ベヒシュタインが原注でもう一つ記しているスケレラトゥス *Sceleratus* は、ラヌンクルス・スケレラトゥス *Ranunculus sceleratus* のこと。これは特に有毒な毒金風花 *Giftrannikel* である。

- (52) 白屈菜 *Goldwurz*. 原文の「ゴルトヴルツェル」は「黄金の根」の意。学名リリウム・マルタゴン *Lilium martagon*。罂粟科の多年生草本。ドイツでは高さ一メートルにもなる。茎は黄褐色の汁を含み、葉は菊に似る。汁は有毒で、葉は発泡に用いる。茎・葉の汁は痒みの激しい白癬、いわゆる「たむし」に有効。根は痛の薬として用いられたことがある。泉鏡花の雑記の一つに「白屈菜記」(明治三十六年十月)がある。胃痛で病臥していた師尾崎紅葉のために、硯友社の他の同人たちとともにこれを探した折のもの。

- (53) 和蘭菖蒲 *Allernaharisch*. 普通 *Allernaharisch* だが、ベヒシュタインはこのように綴っている。いずれにせよ「アレマン族」(ケルマン人の一部族)の意。学名アリウム・ヴィクタリア *Allium victorale*。菖蒲科の多年生草本。地下に大蒜状の球茎があり、葉は剣状。夏、漏斗状の花を穂状につける。色は白・赤・黄・紫などが普通。

- (54) 車葉草 *Waldmeister*. 原文の「ヴァルトマイスター」は「森番、山番」の意。学名アスペルラ・オドラータ *Asperula odorata*。西科車葉草属。草長三〇センチまで。茎を輪状に取り巻く葉を持ち、上部に、大抵は白い、四弁の小さな集団花をつける。ヴァニラに似た芳香を放つ。マリン(桜の葉の芳香もこれ)を含み、草を乾燥して香料とし、五月ポール(葡萄酒・果物・砂糖などを混ぜて冷やした飲み物)の素材とする。

解題

なによりも著者の紹介を。

中部テューリンゲンのアルンシュタットその他で薬剤師主任助手、後にザクセン＝マイニンゲン公国の首邑マイニ

ンゲン⁽²⁾で公爵家の司書となったルートヴィヒ・ベヒシュタイン Ludwig Bechstein (一八〇一—一六〇)は、十九世紀のドイツ語圏において、彼自身が極めて尊敬していたグリム兄弟すら遙かに凌ぎ、最も精力的かつ最も人気のあった口承文芸編著者だった。

彼はフランス人亡命者ルイ・ユベール・デュポントロー⁽³⁾の非嫡出子として、一八〇一年十一月二十四日ザクセン＝ヴァイマル公国の首邑ヴァイマルに生まれた。母ヨハンナ・ドロテア・ベヒシュタインは当時二十六歳、アルテンブルク⁽⁵⁾の官吏ヨーハン・ヴィルヘルム・ベヒシュタイン⁽⁶⁾の娘だった。フランスのヴァンデ地方⁽⁷⁾のフォントネイ・ル・コント⁽⁸⁾出身である父は、絶えず旅行していて、定住地は不明、と記録されているのみ。

ルートヴィヒは誕生後すぐに母親によって報酬目当ての人間の許に里子に出され、一八一〇年まで不幸で悲しい子ども時代を送る。この年、マイニンゲン近郊のドライスイヒアカー在住で、母方の伯父に当たる、植物学と鳥類学の分野で今日でもその名は忘れられていないヨーハン・マテウス・ベヒシュタイン⁽¹⁰⁾が子どもを引き取り、自身の姓をも与えた。ルートヴィヒ・ベヒシュタインが自然を、そしてとりわけテューリングン⁽⁹⁾森^(ワルト)のうらかな山並に深い愛着を持ったのは、疑いも無くこの伯父の薫陶を受けたためであろう。彼は養父のために記念碑を建立したし、一八五五年には『ヨーハン・マテウス博士とドライスイヒアカー林学講習所^(アカデミー)』なる著書を刊行している。

さて、伯父の庇護下に置かれたお蔭でこの子はマイニンゲン古典語^(リ)中高等学校^(ツ)に入学することもできた。余暇に彼は多量の読書に耽り、奉公人部屋で故郷テューリングンの伝説を物語るのを好んだ。結局彼の勉学熱は空想力ほど強くはなく、大学^(ア)入学資格試験^(ヒ)（＝古典語中高等学校^(ツ)・古典語中高等学校卒業資格試験^(ム)）の前に学校を止め、一八一八年アルンシュタットの薬剤師の徒弟となった。その後アルンシュタット、マイニンゲン、バート・ザルツンゲン⁽¹¹⁾で薬剤師主任助手として仕事、傍ら著述を続けた。こうして十年が過ぎたが、その後の人生は決定的に変わった。彼の

君侯ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイントが、一八二八年に出版されたベヒシュタインの『十四行詩の環』*Sonettenschanze* ⁽¹³⁾を読んでこの若き抒情詩人に着目したためである。

公爵の後援で、ベヒシュタインは一八二九年と一八三〇年、ライプツィヒ大学とミュンヘン大学で哲学、史学、文学を学んだ。既に述べたように大学入学資格試験は受けずじまいだったが、学籍登録はできたのである。一八二三年『テューリンゲンの民話』*Thüringische Volksmärchen*と題する創作集を発表したほどの才子だから、それも当然かも知れない。

短期の大学生活ではあったが、お蔭で彼の心に「古代」への著しい傾倒が目覚めた。一八三一年故郷へ戻り、公爵によって司書に任命された彼は、一八三二年「ヘンネベルク古代研究協会」を創立、死の三年前までその初代協会長の座にあった。一八三二年には二十四歳のカロリーネ・ヴィスケマンと結婚⁽¹⁴⁾もした。彼女は一子ラインホルトを産んだが、早くも一八三四年に死ぬ。一八三五年ベヒシュタインはテレゼ・シュルツと再婚⁽¹⁵⁾。彼女は七人の子を彼に贈った⁽¹⁶⁾。

当時の司書というものがそうだったように、ベヒシュタインも自由な生涯を送った。彼は資料を収集し、著述を行い、詩文を創作し、幾つもの大旅行を敢行、パリへも赴いた。しかしフランスは彼の性に合わなかった。アルザスのヴォージュ山地（ドイツ風に申さば、エルザスのヴォーゲゼン山地）まで戻って来て、やつとのんびりしたようだ。一八五六年ザクセン＝マイニンゲン公国太子ゲオルクとイタリアへも旅行しているが、結局のところ、彼を魅惑したのは三つの地方のみ。すなわち、テューリンゲン、フランケン、そしてポヘミアである。これらの地方はとりわけ彼の口承文芸収集の情熱に報いてくれた。

『テューリンゲン地方の伝説群と伝説圏』*Der Sagenschatz und die Sagenreise der Thüringerlands* (一八三五―

三八)、『オーストリア帝国の民間伝説、昔話、宗教伝説 *Die Volksgen, Märchen und Legenden des Kaiserstaats Österreich* (一八四〇)。奇妙なことだが、題目に明記されているにも関わらず昔話は収録されていない)、『フランケン地方の伝説群』*Der Sagenschatz des Frankenlandes* (一八四二)、『ドイツ伝説集』*Deutsches Sagenbuch* (一八五三)、『テューリンゲン伝説集』*Thüringer Sagenbuch* (一八五七)が継続出版された。これをもってなお足りとせず、彼は歴史資料や伝説を素材として民謡調物語詩や譚詩も少なからず生み出した。既に一八二九年『リブツサの予言』*Die Weissagung der Libussa* を刊行しているし、更に『ハイモンの子どもたち』*Die Heimons-Kinder* (一八三〇)、『ホルバインの絵に刺激されて』*死の舞踏』Der Totentanz* (一八三二)、『ファウストゥス』*Faustus* (一八三三)、『ルター』*Luther* (一八三四)、そして死後の一八六五年『テューリンゲンの王家。その災禍と没落』*Thüringens Königshaus. Sein Fluch und Fall* が上梓された。

これに加うるに歴史小説、紀行もあるが、これらは一応措くことにする。

しかし、グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』*Kinder- und Hausmärchen* (KHM) を幼いころ愛読した筆者にとつて最も関心があるのは、他でもない、グリム以降、グリム兄弟に類似した昔話収集上の業績を、それもKHMとほぼ同様の分量で残した彼の昔話集である。すなわち、『ドイツ昔話集』*Deutsches Märchenbuch* (一八四五)、『新ドイツ昔話集』*Neues Deutsches Märchenbuch* (一八五六)、そしてもう一つ『ドイツ昔話集』*Deutsches Märchenbuch* (一八五七)、更に既にちらと言及した『テューリンゲンの民話』(一八二三)の四集。

ちなみに一八五七年版の『ドイツ昔話集』には著名なロマン派の画家ルートヴィヒ・リヒター(16)の挿絵が豊富に鏤められている。収録された昔話にはKHM決定版(やはり一八五七)のそれと重複するものも少なくないが、日本では知られていないたいがいの方がずっと多い。また、ベヒシュタインの編集は文芸学的に行われているので、昔話

本来の素材さを失わないまま、物語として首尾一貫し、KHMにはややもすれば発見される筋の欠落、不自然、尻切れとんぼといった瑕疵かしはまず存在しない。ベヒシュタインの『昔話集』メルヘンは世紀転換期（十九世紀末から二十世紀初頭のことであろう）まで（のドイツ語圏では）グリムのKHMより愛され、より普及していた、とは比較口承文芸研究・民俗学の泰斗、永年フライブルク大学民俗学科主任の要職にあったルツ・レーリヒ Prof. Dr. Lutz Röhrich の言葉である。なおレーリヒは、こうした大きな成果には確かにリヒターの挿絵の数数も大いに貢献している、とも付言している。²⁰〔敬愛するレーリヒ先生は二〇〇六年十二月二十九日に物故された〕。

最後のもの、すなわちベヒシュタインの初期の愛らしい習作は、ロマン主義的色彩の濃厚な美しい文体の四つの物語から成る。すなわち、

「ゼリンデ」Selinde

「ハラルト・フォン・アイヒェン —— 十二世紀後半の一齣」Harald von Eichen. Eine Skizze aus der 2ten Hälfte des 12ten Jahrhunderts.

「ゼーラーの洞窟 —— 民話」Die Böhlershöhle. Volksmärchen.

「巨人の匙 —— ある昔話」Der Riesenlöffel. Ein Märchen.

これらはグリム兄弟の行き方とは異なり、ムゼーウス著『ドイツ人の民話』と同じく素材を民間伝承に借りた、あるいは借りたように見せ掛けている創作昔話メルヘンである。従って口承文芸論の資料とはなし得ない。

けれども、その物語作法メタテクにムゼーウスの影響が甚だ顕著であり、「ゼリンデ」に至ってはムゼーウスの「メレクザ

「ラ」の登場人物を借りて来て楽しんでるので、『ドイツ人の民話』の訳・注・解題を全三巻（『リュートベツァールの物語』『沈黙の恋』『メレクザール』）として本邦で始めて刊行し得た筆者は、こりゃあ、ぼくでなくっちゃ訳せない、と「ゼリンデ」紹介を思い立った次第である。更にまた騎虎の勢い^ウ已むに已まねず、第二話「ハラルト・フォン・アイヒェン」も訳了間近。これは「人文学会雑誌」第三九巻第四号に掲載する予定。

一八六〇年五月十四日ベヒシュタイン逝去。享年五十九歳。墓はマイニンゲンの公園墓地にある。

解題注

(1) アルンシュタット Arnsdorf. テューリンゲンの豪族の一つだったシュヴァルツブルク^クゾンダースハウゼン家のかつての城下町。ほどほどの産業基盤を持ち、伝統ある文化の中心で、保養地でもある。十九世紀の人口二〇〇〇〇万ほどか（二〇〇六年現在二五〇〇〇余。古くはヘルスフェルト家の代官としてケーフェルンブルク伯爵家が治めていたが、二二〇六年シュヴァルツブルク伯爵家の手に渡り、同家は一七〇六年までここに宮廷を開いていた。

(2) マイニンゲン Meiningen. テューリンゲン 森^{ワルト}に接し、ヴェラ川に沿う都市。十九世紀の人口二〇〇〇〇足らずか（二〇〇六年現在二一〇〇〇余）。公爵家の居城だったエリザベータンブルク城の他、宮殿、教会、幾つもの高等教育機関があり、産業にも事欠かない。一六八〇年以降第一次世界大戦終結時までザクセン^クマイニンゲン公国の首邑。

(3) ルイ・ユベール・デュポントロー Louis Hubert Dupontreau. 未詳。

(4) ヨハンナ・ドロテア・ベヒシュタイン Johanna Dorothea Bechstein. 一七五十一一八四七年。

(5) アルテンブルク Altenburg. テューリンゲン東部（オスターラント）のザクセン^クアルテンブルク公国の首邑。十九世紀の人口四〇〇〇〇ほどか（二〇〇六年現在三七〇〇〇余）。

(6) ヨーハン・ヴィルヘルム・ベヒシュタイン Johann Wilhelm Bechstein. 公国宗教局使丁長 Fürstlicher Konsistorialbotenmeister だった。

(7) ヴァンデ地方 Vande. フランス西部。フランス大革命時王党派が蜂起した地方の一つ。ここでの革命政府軍との闘争を主題としたフランス文学には、ヴィクトル・ユゴーの長編小説『九十二年』などがある。

(8) フォントネイ・ル・ロント Fontenay-le-Comte. ヴァンデ川に沿う小都市。ここから舟航可能。

- (9) 里子に出され「わたしは父のいない可哀そうな子だった。母は嬰兒のわたしを報酬目当ての人間の許へ里子に出した」(ベヒシュタインの未完の自伝的小品『スツルツ、スツルツ』「スツルツ、スツルツ」は「Summa Summarum」に拠る)。
- (10) ヨーハン・マテウス・ベヒシュタイン Johann Mathäus Bechstein。動物学者、植物学者にして著述家。一七五七—一八二二年。マイニンゲン近郊のドライスイヒアカー林学講習所講習所の所長の地位にあった彼は一八二二年林学ニ狩猟学協会を設立。大部の著作がある。
- (11) パート・ザルツンゲン Bad Salzungen。マイニンゲン近郊の小都市。十九世紀の人口五〇〇〇ほどか(二〇〇六年現在一七〇〇〇弱)。ヴェラ川とザルツンゲン湖の畔にある極めて古い保養地。
- (12) ザクセン＝マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイント Bernhard Erich Freund, Herzog von Sachsen＝Meiningen。ベルンハルト二世(一八〇〇—一八二二)。一八六六年退位。歴史的には毀譽褒貶相半はする人物。端麗な容貌で、あらゆる階層の人間と親しみ、それゆえ臣下には愛された。しかし、彼の政治的決定はしばしば軽率かつ失敗だった。
- (13) 『十四行詩の環』*Sonettkranz*。一八二八年復活祭市の折アルンシュタットで出版された。「子ども時代のままやかな養母に」として、当時既に夫に死別していた枢密顧問官夫人に捧げられている。
- (14) 「ヘンネベルク古代研究協会」der Hennebergische altertumforschende Verein。ヘンネベルクは十六世紀後半マイニンゲンを支配した君侯家。
- (15) カロリーネ・ウイスケマン Caroline Wissemann。一八〇八—一八三四年。フィリップスタール・アン・デア・ヴェラ出身。
- (16) テレーゼ・シユルツ Therese Schulz。生没年未詳。ウンターマースフェルト出身。
- (17) ゲオルク Georg。後のザクセン＝マイニンゲン公ゲオルク二世(一八二六—一九一四)。一八六六年父ベルンハルト二世の退位後、公位を継ぐ。芸術、特に演劇の振興に貢献したので、演劇公爵 Theaterherzog と異名を取った。
- (18) ホルバイン Holbein。小ハンス・ホルバイン Hans Holbein, der Jüngere (一四九七—一五四三)。父大ハンス・ホルバインや、兄アンブロジウス・ホルバインとともに有名な画家。三者のうちで最も傑出した存在とされる。骸骨姿の死が、教皇・皇帝・王侯から下下に至るまでの男女と手に手を取って踊りつづ、この世から連れ出されて行くさまを描いた一連の図「死の舞踏」は最も有名。
- (19) ルートヴィヒ・リヒター Ludwig Richter。アードリアン・ルートヴィヒ・リヒター Adrian Ludwig Richter (一八〇三—一八八四)。画家。図案家。まず銅版画家である父カール・アウグスト・リヒターの弟子となったが、次いで、十八世紀後半の市民芸術における著名な画家にして銅版画家ダニエル・ニコラウス・ホドヴィエツキイ Daniel Nikolaus Chodowiecki (一七二六—一八〇二)の腐蝕銅版画技法を手本とした。一八二三—二六年イタリア、特にローマに滞在。一八二八—三六年マイセン図案学校の教員、その後一八七六年までドレスデン美術専門学校教授を務めた。ドレスデンでは間もなく木版画を始め、これが次第に彼の芸術活動の主流となり、民衆に目を向けさせた。ドイツの日常生活の

んびりとした叙景、愛すべき諸譚^{フモリム}、豊かな空想力^{フアンタジイ}により、挿絵画家として一世を風靡する活躍をした。ドイツの木版画を大いに振興するのに役立つこれら挿絵が飾った書籍として、フリードリヒ・シラーの『鐘の歌』、ヨーハン・ベーター・ハーベルの『アレマン詩集』、ムゼーウスの『ドイツ人の民話』やルートヴィヒ・ベヒシュタインの『ドイツ昔話集』(一八五七)などが挙げられる。

(20) ベヒシュタインの『昔話集』は……とも付言している ルツ・レーリヒ著『そして彼らはまだ死んじやってはいないから……』Lutz Röhrich: *„und weil sie nicht gestorben sind …“* Böhlau Verlag, Köln/Wemar/Wien 2002. 三三四ページ。原文は左の通り。

Bis um die Jahrhundertwende erfreuten sich Bechsteins Märchenbücher einer größeren Beliebtheit und weiteren Verbreitung als die Grimmischen KHM, wobei zum großen Erfolg sicher auch die Illustrationen durch Ludwig Richter beigetragen haben.